

21 南島雑話

(国宝)

島津家文書一九二一五四〜五八。七冊。縦二七・五cm、横一九・二cm。

江戸時代の奄美大島の社会・産業・自然の図画・記録の書。南島雑話は総称。名越左源太時行(ときとし)一八一九〜八二)著述の「大嶼竊覽」・「大嶼便覧」・「大嶼漫筆」・「南島雑記」と、「南島雑話」(一・二及び三の二冊)・「南島雑話附録」の二類、六部七冊。大島の図解民俗・自然誌として評価が高い。奄美諸島は一五世紀頃から琉球国領であったが、慶長十四(一六〇九)年の琉球征服により島津家領とされた。しかし、近世においても琉球風の習俗は伝えられた。左源太は、島津家の上級藩士で、嘉永二(一八四九)年、次代藩主に島津斉彬を擁立しようとした内訌(お由羅騒動)に坐し、嘉永三年から安政二(一八五五)年まで遠島となり、大島名瀬間切小宿(鹿児島県名瀬市)に謫居した。島人と親しく交わり、異国船来着に備える絵図作成にも参加した。「南島雑話附録」は、文政十二(二八二九)年に大島に派遣された御薬園方の見



砂糖しぼりの図



綱牽きの図

21 南島雑話

聞役伊藤助左衛門の著述を左源太が転写したものの。「南島雑話」一・二・三も、最近の研究で、伊藤の著述を左源太が転写したものとされている。草稿の一部(奄美博物館所蔵)、『大嶼便覧』の自筆稿本(鹿児島県立図書館所蔵)が残る。島津家本は明治時代に稿本や「南島雑話」「南島雑話附録」を整序した浄書本。同系本に永井本(東洋文庫に翻刻。奄美博物館所蔵)がある。島津家本と別の編成をなすのが鹿児島大学本(『日本庶民生活史料集成』一に翻刻)。砂糖しぼりの図は「大嶼漫筆」に収める。奄美諸島は、一八世紀初頭から薩摩藩によりサトウキビ生産を強制された。綱牽の図は「南島雑話」一に収める。「八月十五夜綱牽之図、男を別け、或ハ村中西東方限二別ち、他界にひき争う事なり」と説明がある。髪を結び簪を挿す習俗は、琉球と同じ。(参考)『南島雑話』(東洋文庫、平凡社、一九八四)、『日本庶民生活史料集成』一・二〇(三一書房、一九六八・七二)。